2016　1　31　40分講演レジメ

伊勢湾の環境は今

海の博物館館長　石原義剛

０；SOS運動を始める

・46年前の1969（昭和44）年に、博物館づくりをはじめ、1971年開館した。

・漁業をテーマとする博物館でスタートした。いつか「海」総体をテーマとしたいと考えた。

・その間、わずか2年、博物館の準備と資料の収集のため、毎日のように漁村を歩いた。

・**1970年の暮れに、公害国会が開かれ、公害13法が成立した。「環境庁」が翌年発足していた。**

1970年は大阪で「万国博覧会」が開催された年である。敗戦後の日本が復興に立ち上がり、朝鮮戦争という僥倖に恵まれて、急激な経済的繁栄の機会を生かして、その成果を博覧会として世界に誇示したのである。

しかし、その裏側で、日本は大きな犠牲を払っていた。それが「公害」である。公害は、自然を破壊し、弱く貧しい人々を犠牲にしてきた。

そのことに早くから気付いていた為政者は「公害」という言葉を嫌い、避けるために「環境」という言葉を生み出した。公害問題は環境問題と読みかえられ、明らかな大企業とそれと結託した政治が産んだ「公害」は、原因者や結果を薄められ、拡散されて「環境」という言葉で「公害」が心底に含んでいた痛みを忘れさせていった。

・博物館準備の期間に得たことは、

① **漁師から聞いた「海が汚れた、魚が獲れなくなった」と云う言葉だった。**

② それに初代の館長だった石原円吉（父ですが）が、水産資源保護法という法律の成立に貢献した話

③ **水俣病を避けて通ることが出来ない現実であることを実感したことだった。**―水俣病（「公害原論」宇井純著）―

それで開館式で、海を救う運動「ＳＯＳ運動」のスタートを宣言した。

結果、海の博物館は、漁業、環境をテーマとして活動してきた。

開館以降、海の博物館は「公害」問題と取り組んできたが、海の博物館の取組みは博物館の目的と性格上、「海の汚染」に限られていた。

パワーポイント表紙「伊勢湾の環境は今　　石原義剛　」

１；黒い水事件

・漁協ではじめて見た「黒い木曽川」の写真　　写真①　「黒い木曽川河口」

・昭和 26 年ころから三興製紙事件―昭和 33 年、本州製紙事件

写真（新聞）②　「廃液でノリ半作」

わが国ではじめて明るみに出た海の公害事件。

木曽川下流の漁師たちが訴えた。川水が黒く濁って、川底や漁網にどろどろしたヘドロ状のものが流れ付き、被害が出た。発生源を探ってゆくと、祖父江町の三興製紙の排水口に辿り着いた。漁師らは排水を止めるよう抗議したが、当時、排水を規制する法律もなく、排水口に土嚢を投げ込んで実力行使するしかなかった。このような事件は、東京江戸川の本州製紙事件（昭和 33 年）などでも発生しており、漁民の実力行使でしか止めることができなかった。

しかし、本州製紙事件は結果、日本ではじめての工場排水規制法の制定となった。「黒い水事件」については、海の博物館年報 Vol・・に詳細な報告をした。

●汚染物質垂れ流しの時代―規制の無い時代　1950~1970

２；臭い魚事件―海の四日市公害　　写真（新聞）③　「臭い魚の原因は工場廃液」

写真(新聞)　④　「やっぱり臭い伊勢湾の魚」

・臭いボラ発生

・水俣病裁判の判決　　写真⑤（ユージンスミス「水俣病」写真）

四日市『公害』　　写真⑥（「汚染海域」より「工業地帯上空」）

伊勢湾口の油流失事故　　写真⑦（「流失油の処理」）

写真⑧奇形魚（海の博物館）

農薬の普及による汚染　　写真⑨奇形ボラ

漁民が阻止した中南勢工業開発（新全総）　写真（新聞）⑩「中・南勢に製鉄所」

◎温排水―原子力発電所

◎昭和４５年１２月「公害国会開催―公害 13 法と環境庁設置」

●公害基本法以降の時代―緩やかな規制、企業優先 1970～1990

●都市・家庭から出る水質汚濁―工場排水から都市生活排水

1990～

３；漁村から始まった合成洗剤追放運動

写真⑪川に流れる洗剤のアワ

４；赤潮と青潮　　写真⑫赤潮

写真⑬青潮

●排出源である大工場に反対

５；汐川干潟を守る運動―藤前干潟を守る

流域下水道反対運動

長良川河口堰反対運動

中部国際空港建設反対運動

◎伊勢湾公害年表を作る

●無制限に増大する水需要―過消費時代へ

６；伊勢湾は甦れるか

海に溜まるゴミ―漂着ゴミ－ムダの塊

伊勢湾は死の海―貧酸素水塊

漁獲量の激減

漁獲魚種・生物種の激減

手立ては２つ

藻場・干潟の復活―長い時間　　写真⑭干潟

陸の暮らしから化学物質の削減　　写真⑮藻場

写真⑯魚付き林

海女文化の保存・振興に取組んでいる理由は、

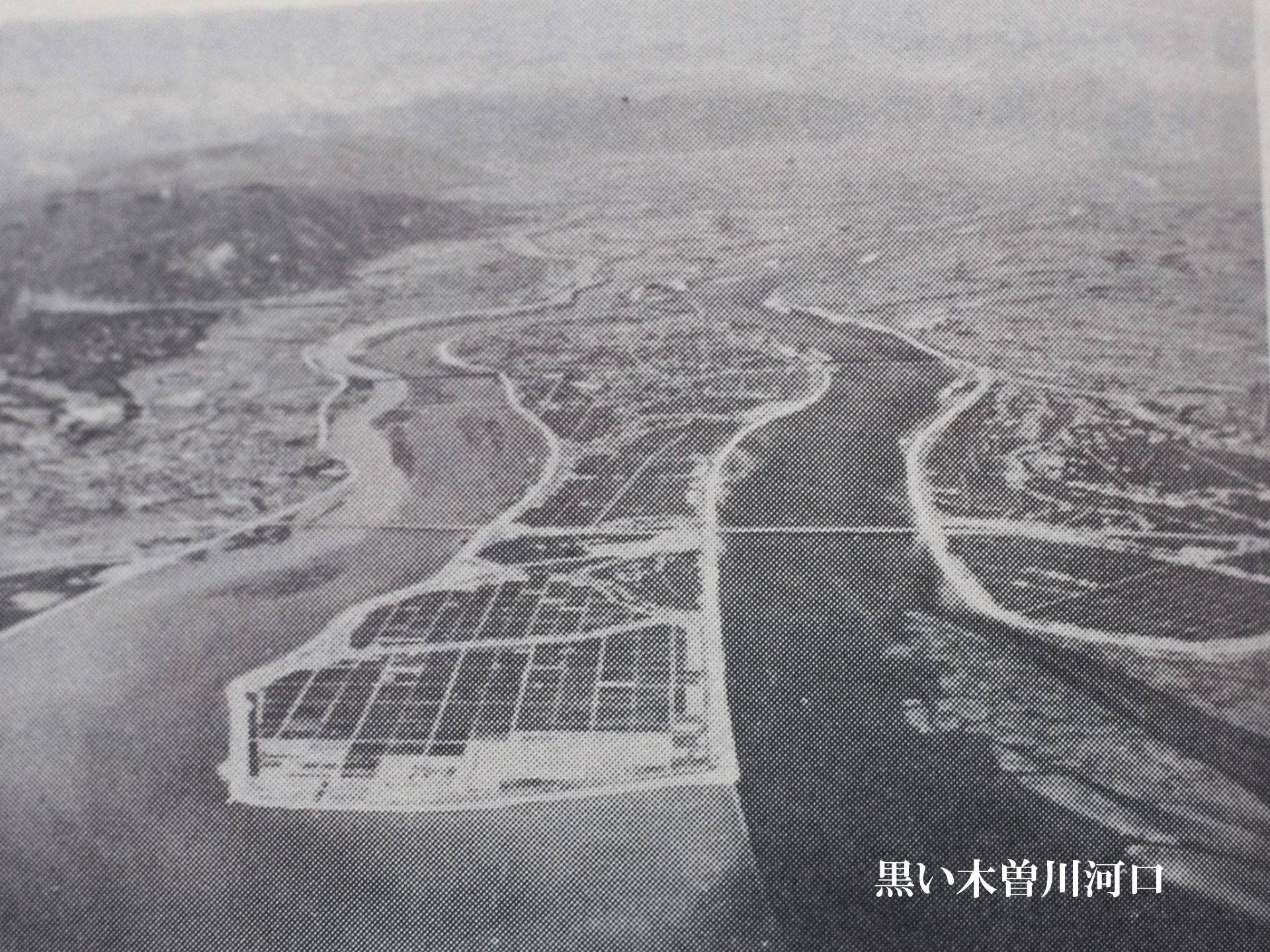
自然と共存する生き方

物質消費の楽しみ方からの脱却

持続的な暮らし

伊勢湾の環境は今

海の博物館
石原義剛



黒い木曽川河口

新聞 32. 2. 23 購読料1カ月（前金）200円・1部7円 第3種郵便物認可

漁夫四百人が工場へ乱入

〝廃液でノリ半作〟

香良洲など三漁組 会社側態度を怒る

二十二日午前十時半ごろ津市藤方、中央毛織株式会社（佐佐木政一郎社長）に、同会社の廃液で養殖ノリに大きな被害を受けている香良洲漁協（今井金左衛門組合長）の三漁協組の六年越しの不満が爆発したもの。同会社の廃液というのは羊毛を洗浄し、羊毛についている植物性の繊物（ぼろ）炭）作業から生れる液で、カリ性のグリス分（油脂）を含まれており、ノリなど魚貝類の養の量が少くなるため、同会社の廃液排水口付近の一帯約十八万坪の養殖場は、ここ二、三年で収穫に減つたといわれていた。この日、廃液排水口付近に集まった四百人の漁協組合員は、ず用意してきた土ノウ約二百袋で廃液が相川支流に注ぐ排水口を堰止め、同会社の裏側トタン塀をおし破つて、なだれこみ、工場に集まり、持つてきたカマ、クイ打ち、カマなどを投げ「会社代表に会わせろ」「すぐ止めよ」と絶叫、会社の時でかけつけた津署員と、ぜり合い、激生じ約二十分間あげく、今井金左衛門組合長側代表約十数名が佐佐木交渉したが、組合員らは取り囲み、一時は立入禁止まで入りこんで気勢をあげ、交渉、激こうした漁協側の不誠意をなじる応酬合いがあり、津署が双方の言分をきくとの

だれ込んだ漁民と警官のせり合い㊥と土ノウでせき止められた排水口

このノリ騒動は津市藤方、相川河口にノリ養殖場をもつている同市米津漁協（木下俊雄組合長）同曽出漁協（岸江甚助組合長）一市郡

新潟日報　昭和36年4月11日　火曜日

『臭い魚』の原因は工場廃液

油や硫化物が作用
異様な臭気が…
県 汚水調査の中間発表

県総合開発本部は十日、伊勢潟汚水調査の中間報告を発表した。汚水問題が世間の注視を浴びるようになってから初めて出された中間報告で、伊勢潟汚水調査対策推進協議会専門調査委員団により、おもに四日市港周辺の「臭い魚」について原因究明がなされた。これによると伊勢潟の「臭い魚」の原因は工場廃液のうち油が主で、それに硫化物、水硫化物が作用して異様な臭気をおびていることがわかった。

同調査委員長の川本毅(種博(県立大水産学部教授)は十一日上京し、通産、経企、水道の各省庁に調査結果を報告する。伊勢潟の汚水問題については、これまでにもたびたび国会の議題にのぼり、上京の田中知事も説明を求められていたが、こんどの報告書完成に伴い近く知事も上京、問題について農林大臣と話し合うことになっている。調査の経過、内容、結果は次のとおり。

▽工場廃水は四日市港周辺の石原産業など十五工場のものの化学分析を行ない、海水汚染は工場の直接廃水と三滝川、大井川からの汚水、港湾内各地点の海水を採集して分析した。とくに海底の泥に重点をおいた。着臭については水域環境調査のため、港内に十二の測点を設け、水温、透明度、塩素量、酸素量、水素イオン濃度、底生動物、プランクトンなどを調査、またウナギを使って廃水の魚類にたいする影響を調べた。このほか港内飼育着臭試験にはクロダイを用いて好結果を得たが、ニジマスによる実験では着臭しなかった。

▽異臭については、異臭物質が何であるかを究明するため、四日市港と津海岸でとれたボラをこまかくくだいて化学処理し、ガスクロマトグラムで両者を比較し、究明につとめた。一方、港内海水中の臭気物質を求めるための化学操作も行なった。海関調査は噴煙のつどうで本年度に実施することにした。

▽これら各種調査の結果、工場廃水からは多量の油と硫化物をふくんだ物質、水溶性硫化ソーダ、チタン、第二鉄塩などが検出され、これが港内海水中で相互反応を起こして硫化物、水硫化物硫酸塩、硫化水素の発生原因となり、さらに有機、無機の浮しゅう物が油性物質を吸着濃縮、沈殿して海底は油脂分の沈着と分解による硫化水素の発生がみられた。したがって、港内での魚貝類の臭気は油分、フェノール類、硫化物(ガスと水硫化物)によると考えられる。

▽海水と底土汚染については、工場排水口近くの底土には油脂分がきわめて多く、腐敗を起こしているように見受けられた。ま

県の決定認

四日市市 平田市長 午起

【四日市】四日市午起埋め立て地の利用問題をめぐって、田中知事と平田四日市市長が真っ向うから対立して注目されているが、平田市長は十日の記者会見で「田中知事がこれまでの約束を破って、一営利会社に全部を利用させるという決定をしたことは、市としては納得できない。再考をうながすとともに、この決定を要望しなければ、今後の県への協力も考え直さなければならない」と語った。同市長はこのほか、八幡興鉄誘致問題、四

業者協定

臭い魚の原因は
工場廃液

〈伊勢新聞〉 昭和35年6月25日

やっぱり臭い伊勢湾の魚

とても食用には無理

伊勢湾漁連が調査 工場側へ補償

【四日市】〝油臭い魚〟として大阪、東京など各地市場から漁獲物の締め出しを食っている伊勢湾漁連では四日市市周辺の工場が実際にどれだけ工場廃液によって汚染され、油臭くて食えないものか調べるため二十五日、県水産課、県水試伊勢湾分場、県衛研、四日市保健所の協力を得て初の海面調査をした。アグリ網漁船二隻を使い四日市港周辺の三漁場で獲れた魚を試食してみたが、やっぱり臭くて食用にはならぬことが改めて確認された。この結果、沿岸漁民三千人の生活ともつながり、工場へ補償要求が出されるもよう。

この調査は最近、四日市市周辺でとれる魚が臨海地帯にある石油工場から出る廃液で油臭くなり、阪神、京浜地方の大口消費地では業者から「伊勢湾でとれる魚は臭くて食えない」と苦情が続出、せっかく出荷したものも全てくるありさま。この市市磯津漁協組をはけている沿岸漁民は死活問題だと、関係に補償を強求するこの調査を始めたもの

この朝八時半、鈴組から四日市市での関係十組合の県水産課山本調伊勢湾分場の水県衛研、石川技後藤衛生課長等漁協組のアど六隻の調査日市午起沖、

四日市沖でと

ユージン・スミス「水俣病」写真

名古屋 臨海工業地域

流失油に中和剤を散布

博物館に持ち込まれた
腫瘍のできた魚

背骨の曲がったボラ

中・南勢に製鉄所を誘致

知事 県議会特別委で言明

第一候補地に伊勢市

神鋼と話し合い進

県議会の製鉄所誘致特別委員会（渡本哲一委員長）は、二十一日午前十時から、県議事堂内で八時間ぶっぶっ通しで、県側から田中知事、高谷副知事、田川工業開発部長等多数の出席を求め、当面、県内進出が計画されている製鉄所について概要を聞いた。席上、田中知事は四日市市南・浦地先に進出を計画している八幡製鉄のほかに、神戸製鋼（本社神戸市葺合区脇浜町、外山繁雄社長、資本金二十億円）とのあいだで、中南勢進出の話し合いを進めていることを明らかにした。

この日の委員会は「県側の構想を聞く」だけで終わり、八幡製鉄進出にそなえる漁業補償金の県負担問題については、二月上旬に開く予定の委員会に持ち越された。県側が委員会で明らかにした諸点は、次のとおりなのである。

○…四日市市南・浦地先に進出を計画、すでに調査をはじめている八幡製鉄の工業地帯は、二千ヘクタール（高炉四基、粗鋼年産資本一千九百億円、資本一千億円）である。三年で土地造成を終わり、四年目に高炉一基を設置、順次増設して八年で完成、年一百―四百万トンの鉄鋼を生産する計画。すでに工業用地造成（六百九十三万平方メートル）のための漁業補償の話し合いが、四日市市と地元漁協組とのあいだですすめられ補償金額は関連補償金をふくめて六億円にのぼっている。四日市市では県、市折半の線で補償を負担しているが、県ではまだ態度を決定したわけではない。問題は税収入で、誘致後に県と市に入る税収によって算定するため、いま税務課で査定をつづけている。

○…中、南勢臨海地帯の工業化をはかるため、二十日、田中知事は神戸市の神戸製鋼本社をたずね、同社重役に県内誘致について要請した。引き続き知事は、二十二日中に工業と同社誘致委員会と会い工業誘致について話し合うことにしている。同社は製鉄所建設用地を本国内に物色中で、昨年末は津、松阪、伊勢の三地区について現地調査を行なった。投下資本は八百―一千億円、所要用地は三百三千万平方メートル程度という以外詳細のための条件もわかっていない。県では多気郡明和町大淀地先から伊勢市村松地先にわたる一帯を第一候補地にあげ、誘致に力を入れることにしている。

○…三重郡川越村地先八百六十万平方メートルの土地埋め立て造成が、三井不動産の手で進められ、五億五千万円の漁業補償が行なわれるが、このほかに八幡製鉄の場合と違って県の負担問題は起きない。三井不動産が進出早々に地ならしを急ぐ

「中・南勢に製鉄所」

推進

中、南勢に大工場

新たに

川に流れる洗剤のアワ

赤潮

青潮

死んだバカガイ

死んで打ちあがった魚

スナメリの死がい

カメの死がい

干潟

アマモ場

アマモ場の中

魚付き林

魚付き林